



第四回大会記事

本会第四回大会は、昭和三十七年度東北史学会
春季大会と併催の形で、去る六月十六、十七日、
弘前大学文理学部において開催された。本会関係
の行事は次の通りである。

十六日

学生部会（一五〇—一三〇〇）

十七日

日本史部会Ⅰ（九〇〇—一二〇〇）

地方史部会（〃〃〃〃）

考古学部会（〃〃〃〃）

史料展示会（九〇〇—一四〇〇）

部会（二五〇—一六〇〇）

当日は会員多数の参加を得て、盛会場に於てす
ることができたが、東北史学会大会の運営に於て
初めて、会員多数の賛力を頂いた。殊に八木橋武
実、柳川忠三の両会員が御印威の寄与なす史料の

展示を許されたことは、誠に感謝に堪えないこと
である。

当日の研究発表の中から、本会々員の発表され
たもの及び本報に関係が深いものの及ぶをあらわ
すの要旨を掲げることとする。

○研究発表要旨

学生部会

○津軽新田開発と屏風山

弘前大学 菅井 達生

屏風山は、津軽藩中興の策主と云われる四代目
信政公が、天和二年に敗立てたものである。屏風
山は北郡鶴田町清水森を起点として、北郡西瀬し
て日本海に面し、七里長浜にのびて斗ヶ崎北上し、
西郡車力村富光の十三湖兩岸に沿っている。丁度
林の形をみた場合、屏風の様になっているので、
この名前がつけられたという。しかしこれは正式
の名前ではないようです。津軽新田開発中、特
に現在の西北兩郡の新田開発史を考える際には、
必ず屏風山のことと表面に出て来るのである。

がし、この屏風山に關する史料が、殆ど皆無の爲、
簡単に補説程度にししか取扱うことが出来ず、先人
の調査が殆ど正事であるやうとしている。

この津越等の嶺に津越平野と呼ばれている地域
は、屏風山取立以前には、三四坪乃至四五坪毎
に冷害に打たれるといつた有様であつたが、こ
の取立後は、漸く新田開墾も活発となり、田畑も
増え、人口も増えていゝ程であり、天明の飢饉
の際には、人々は本村で伐取販賣して生活の糧を
得、米の不足の便を採取して食糧としたのである。
しかしその後に天竺の荒廢地に帰せんとしたのを藩主・地元
有識家によって再興され現在に至つてゐるのである。
これを考ふるに、この屏風山を取立てた信政の
先見の明がなかつたため、現在の青森県の基礎を築
くことは出来なかつたのであらうと思われる。幕末
の隆々しい時代に、この屏風山も人々の畏れはな
きものの考へ方に隨ひ荒廢したやうであるが、こ
れも信政公以来よりの屏風山の悪態を知つてゐる
人々によつて、昔以上に、発展を及ており、先人
の努力がここにそのほんの一部だけではあるが、
述べて及たいと思ふ。

日本史部会工

○条約改正問題の一考察

川内中學校 稲葉 克夫

条約改正問題を外交交渉史としてではなく、改正
論の論理でとらえて、その論理構造の分析を通して
史的意義を究明する。

条約改正問題は民族国家の完成という至上命令
で國民的課題となつたが、発想は名分的觀念論で
あつた、理論的指導者たる明六社の理論も公法思
想とナショナリズムとに分裂してゐた

しかし条約改正の本質は資本主義体制の整備に
ある。従つてまずとられた具體的方策は税権取り
しである。この方針をまずとつた寺島外支の背
景は失敗の要因、これに次ぐ井上外支の本質、特
に龍崎館時代の基盤に注目したい。

条約改正論の論理的帰結は憲法發布と議會制度
の確立にあつた。その後は政略の手段化されたり、
帝國主義思想の起動となつていくが、その論理的
必然性は早期より蔵してゐたといふやう。

条約改正問題は多面的意義をもつてゐる。例え

は国民の頭を政府批判を、つまり原富期の犠牲者
たちの抵抗をそれと役割も持ったし、それ自体世
界史的必然性であり、しかも国民と資本との利害
の衝突分裂を内部要因としてもち、その成長と共
に変貌をとけて行った。

地方史部会

○近世津軽の庚申塔

弘前実業高校 小籠 衷三

津軽の民間信仰の一つとして庚申信仰があげら
れ、民俗学、宗教学的に研究がなされているが、
庚申信仰が、津軽に江戸時代に入ってからどの様
に蔓延していったかを、庚申塔の調査により簡明
に全国的に示して来ている庚申信仰の研究の貢
献をしたい。

発表内容

一調査地域

二調査の歴史

① 建立年月日

② 種類

三調査の成果（プリント配布）

四、問題点

① 当地方の特色

② 他地方との比較

③ 今後の問題点

○弘前藩の富突について

陸奥史談会 小野 慎吉

富突という言葉は其本集に見えているから、鎌
倉時代にもあったことでしょう。徳川時代には元
禄、享保頃には行われていたようです。もと富突
の興行は神社の再建・修葺などに要する淨財を得
るために、官に願い出て許可になるものでありま
す。文化頃には全国に広く行なわれるようになり、
文政、天保の頃は著しく流行し、遂に官利査の手
に利用され賭博類似の行為に陥るなど弊害が多か

るので、幕府の弊政改革にのりて禁止となり殆ど時愈しました。

さて弘前藩の富突は文化九年に初めて發行されたといわれています。楚雲院の大破修覆の費を得るためと、農民の融通にも役立たせたいと藩に頼んで許されたのであります。以後頻りに行われたが、心ある者は好もしくならぬ流行と思つていたようです。時の御用人が存せが頻りに抑え付けたと批判的な記事も見えています。文政年間奥平寺では三年間に十五度も許可になり、先年堀込後佐屋住居であつたお寺が富突の判令で新築成り、同年四月盛んに八公供養が行われました。この外大円寺弁天堂徳富寺大行院耕亭院すた徳雲院で發行されていす。鶴茂森の芝居普請で數回許可していることは異例で、何か款あることと世評があらした。富突には緊品引換所があり、富札の売込めに力め当日は資金を当り札引替に渡します。富札の發行枚數一枚の價によつて資金に差のあることは勿論ですが、巻頭巻軸が最も多額で中向は

段々落ちになっています。

以上の如く幕府の禁止以後、弘前藩でも嚴重に取締つたためか、天保末年のあと富突の記事は見当りませんでした。それでも全国的に行われていたものが、明治元年十二月の布告で金銭融通社寺再建を名とし富を興行することを嚴禁しています。

弘前藩の西洋学

弘前大学 羽薙 与七郎

津輕藩の江戸邸には元禄時代から蘭医の出入あり、また舶載の嗜好品も購入されていた。明和、安永時代に岡山正哲永世のように「評傳新書」の翻訳に参加した人物も現われた。寛政八年に藩校権右館が設立され、医学教育も行われるが蘭医も参加するが、和蘭医学が正課として採用されたかは今のところ不明である。安政五年に設立された医学館には蘭書識訳材があつた。

本藩の兵学は山鹿流であつたが、嘉永元年に初

めて高嶋流師家が現われ、安政二年には調練はすべて和蘭流に変更され、明治三年三月にこれが儀式となり、同年七月には儀式となった。

明治元年には蘭学外科教授も行われ、同三年には医学教授はすべて西洋流に改められている。

牛痘痘の伝来も早くから本藩では見られる。戸坂海海の門人、密牛島寺は桑田立齋より牛痘痘を伝授され、嘉永六年より牛痘痘を領内小児に強制するよう当局に上申したが、客るところとなり、文久二年三月区学館に漸く痘痘鑑が併置されて、痘痘が公示されたがこれを喜ばないものが多かった。嘉永二年の痘痘の大流行のときは大いに痘痘が行われたが、これと同時に寺院では痘痘接種が行われていた。

文久元年八月から君沢型の青森丸が運航した。

これは本藩における西洋流の船の初めである。嘉永元は同年三月藍船焼棄された、文久二年九月海軍が創設され、測量学、機南学等西洋科学の嘉永生が江戸に派遣され、等々が養成され、慶應二年正

月君沢型の安齊丸が竣工した。明治元年英國の蒸氣船ソルタント号を購入しようとした。この船は横浜より青森に入港している。ここに於いて西洋科学の摂取が行われるのは当然であろう。

○津輕の製鉄史概見

青森県文化伝専門委 氏田 末五郎

1. 製鉄遺跡の分布と住居
2. 製鉄に関する文献
3. 津軽鉄の持異性
4. 鉄製家の移動と移業

の安東氏と北條氏

東北大学 豊田 武

(本等掲載につき、要旨省略)

考古学刊

○青森県上八幡遺跡

低湿地遺跡の概要

尾上中幸辰 工藤 正

青森県に於ける縄文晩期の低湿地遺跡は、遷ヶ岡、堤川の両遺跡に於て代表され、遺跡の性格が記述するまでもなく、その究明がなされて来た。低湿地遺跡の基本的性格の究明にあたり、新に八幡時低湿地の遺跡の概要を報告したい。

一、遺跡は全く新しい遺跡で、遺跡遺物の包含は前記の二遺跡に比するに遺跡である。縄文晩期の前

展示史料目録

- 1、藤沼津輕高信書状、大泉福成守宛
- 2、三代津輕信義短冊
- 3、四代津輕信政黒印状

期の遺跡である。この期の特徵ある遺物は大方出土されてゐる。昭和三十六年度は第一年度の試掘調査で、遺跡の中格的調査究明はなされてゐないが、今後の低湿地遺跡究明の資料に資すれば幸いである。

1、遺跡の概要、経過

2、発掘調査状況派と出土品

3、八幡崎遺跡マライド映写

○青森県田舎館遺跡の発掘

東北大学 伊東 信雄

(マライド使用による説明)

- | | |
|----|---------|
| 一通 | 八木橋武実氏蔵 |
| 一通 | 〃 |
| 一通 | 〃 |

| | | | | |
|-----|----------------|----------------|----|---------|
| 4、 | 同信政書狀 | 柳川豊前(素庵)宛 | 一通 | 長勝寺藏 |
| 5、 | 九代津輕寧親書狀 | | 一通 | 八木橋武家氏藏 |
| 6、 | 久保院(信政家母)書狀 | 津輕大藏(信政家母)宛 | 一通 | 〃 |
| 7、 | 瑞池院(信明夫人)津輕寧親宛 | | 一通 | 〃 |
| 8、 | 僧正天海書狀 | 津輕五郎重臣宛 | 一通 | 柳引 忠三氏藏 |
| 9、 | 弘前繪圖 | 推定堀永家母宛 | 一枚 | 〃 |
| 10、 | 切支丹古文書 | 元禄二年 | 二帖 | 〃 |
| 11、 | 寺院阿山世代調 | 延宝八年 | 一冊 | 長勝寺藏 |
| 12、 | 町田宮松町四郎其衛寛書 | | 一冊 | 八木橋武家氏藏 |
| 13、 | 番割書法記 | 寛元慈元整 | 一冊 | 〃 |
| 14、 | 武田文三前條之日記 | 安政三年一月十六日 | 一冊 | 〃 |
| 15、 | 尾太銅鑼山日記 | 天保二年等 | 一冊 | 〃 |
| 16、 | 尾向合外波名和要六 | 弘化元年等 | 一枚 | 〃 |
| 17、 | 関所通証(碓氷出) | 明暦二年 | 一枚 | 〃 |
| 18、 | 預口手形(信竹宮崎北) | 天保八年 | 一枚 | 〃 |
| 19、 | 家業札 | 相違町與南今村屋市左衛門 | 一枚 | 〃 |
| 20、 | 城内出入門鑑 | 龜甲町御用豆腐屋白取下左衛門 | 一枚 | 〃 |
| 21、 | 借家札 | 和徳町富七所持 | 一枚 | 〃 |